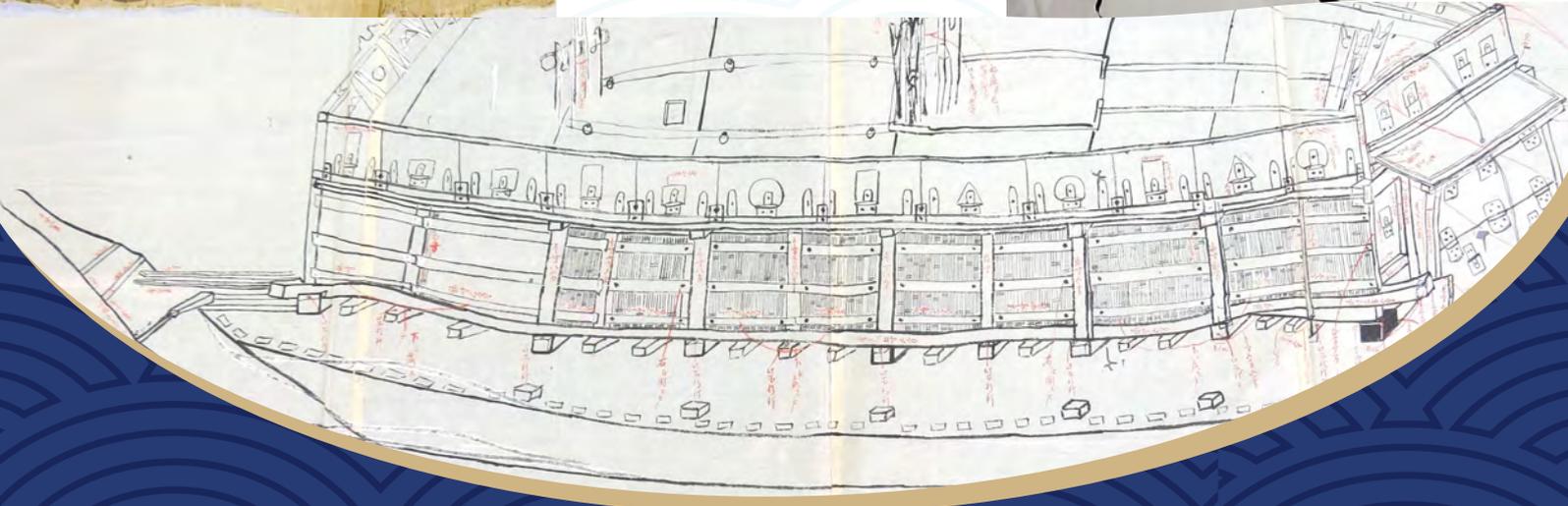
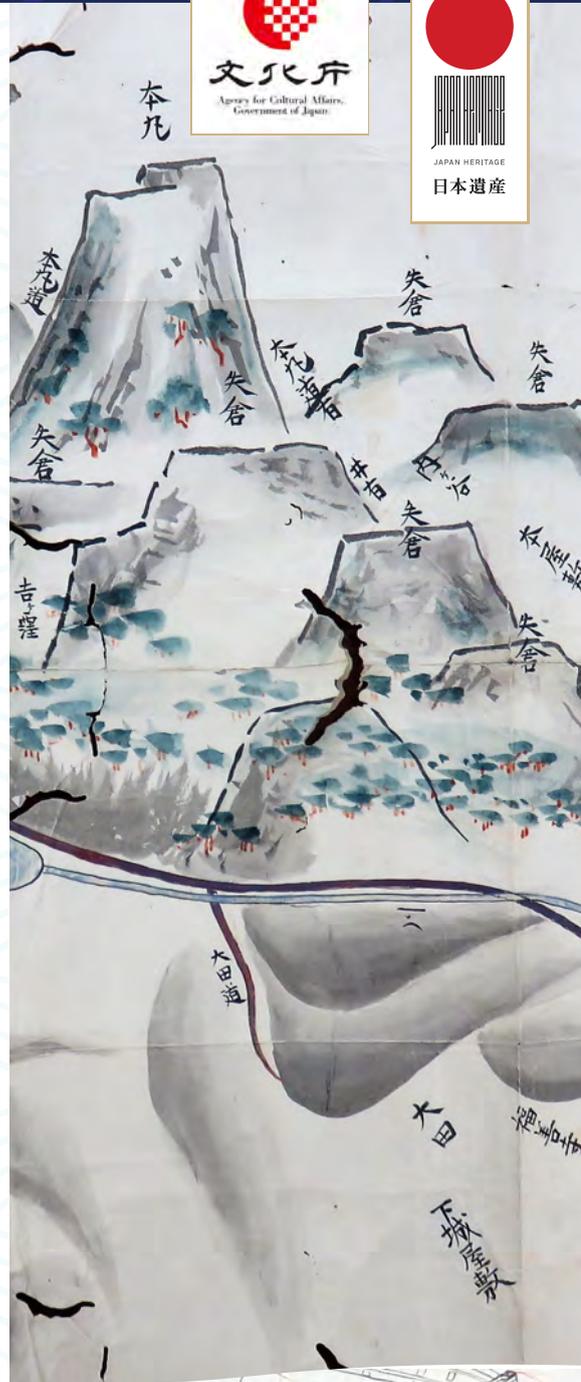


晋江縣有商船
 隻候来年六月
 到此港口看旗
 号比劉一同齋
 来買賣余事無記
 知鈕人王福運
 船主蔡福運
 萬曆十二年十月吉日書

戦国の海に生きた人々

杉原・村上・渋谷氏



I 港町尾道と中世の海運



尾道が瀬戸内海を代表する港町へと発展する契機となったことは、嘉応元年(1169)に備後国大田庄倉敷地に公認されたことによります。その後、港町尾道は、物、人、財が集まる拠点として発展しました。

瀬戸内海において、港町尾道は武家勢力の直接的な支配が及ばない商人や海運業者の町であり、そうした商人たちの拠り所である寺院や神社に多くの寄進が集まりました。

II-1 備後国の国人 高須杉原氏

杉原氏は、備後国の国人で鎌倉時代から戦国時代にかけて、八尾杉原氏、山手杉原氏、木梨杉原氏、高須杉原氏などに分かれ、活動していました。現在の尾道市域では、木梨杉原氏と高須杉原氏が、北部から東部にかけて、勢力を広げていました。

高須杉原氏は、足利尊氏に従った杉原信平・為平兄弟のうち、信平の系統とされています。『高洲家文書高洲長左衛門盛英系譜』によれば、「信平—光信—光盛—行勝—光忠—元忠—盛忠—元盛—元胤—元士—元兼」と続いています。元兼の代は、毛利輝元の時代で、赤間代官も務めています。

杉原信平・為平は、足利尊氏に従い九州など西国で戦い、恩賞として備後国木梨庄、高須社地頭職などを得ています。これにより、現在の木ノ庄町や美ノ郷町、高須町、そして港町尾道を支配下としました。鷲尾山城(木ノ庄町)に杉原信平、家ノ城(木ノ庄町)に杉原為平が入り、城を整備したとされています。

その後、信平系統の杉原行勝の代で、高須を名乗り、文書でも高須の名前が記されています。また、『ゆづり状』(次ページ上部)に見えるように、“備後国高須社の大田、阿草そして、尾道屋敷”などが代々受け継がれています。これによれば、現在の高須町から尾道までの沿岸部を主に領地としていたようです。それは、尾道を中心とした海運にも関わっていたことが考えられ、特に戦国時代の高須元兼の代には、毛利氏に従い、海運に従事していました。

特に高須杉原氏については、重要文化財『高洲家文書』(個人蔵・山口家文書館寄託)により、多くの情報を得ることができます。高須杉原氏は、その立地もあり、南北朝時代から戦国時代にかけて、瀬戸内海の高須に大きく関わっていたことが分かります。



▲日明貿易船旗(高洲家文書 山口県文書館 寄託)

天正12年(1584)に明から来航する貿易船を管理する入港証として使われていました。当時、赤間関(現在の下関市)代官であった高須元兼が発行したもので、高須(杉原)氏の家紋である剣巴紋が大きく書かれています。この船旗が、明商人らが翌年6月に来航した時に約束相手を見つけるための目印であったことが、文書にも書かれています。

ゆつり状之事

備後国高須社之内大田分

あくさ分尾道屋敷五貫文

玉法師丸ニゆつり与所実也

但別仁工罷出候事候者兄

五郎太郎光忠ニ此所領可返付

者也弥兄弟水魚之思懸

なし相共ニたよりニ成候者於

子々孫々不可有相違候万一

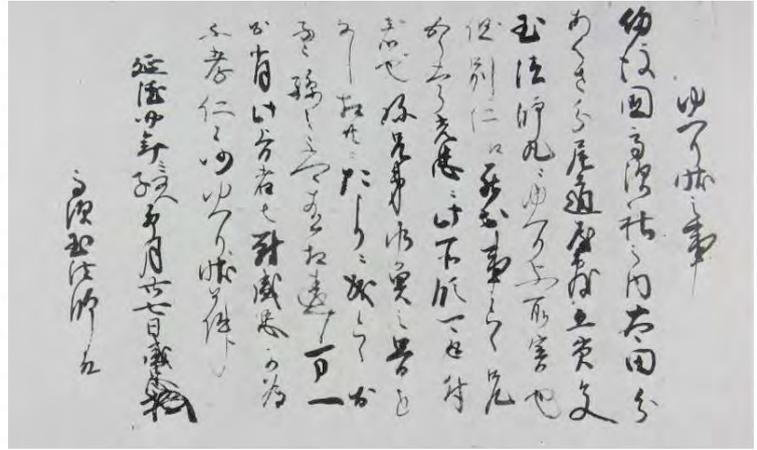
於肖此旨者ハ对盛忠可為

不孝仁候仍ゆつり状如件

延徳四年みつのへ子卯月廿

七日 盛忠判

高須玉法師殿



▲高洲家文書(山口県文書館 寄託)

II-2 高須杉原氏と松尾山城跡

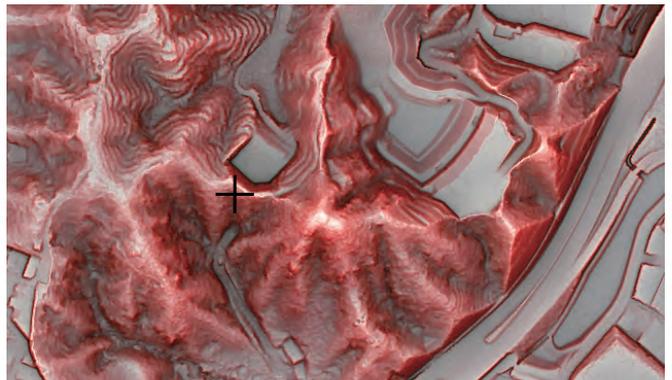
高須杉原氏の本拠地は、尾道市高須町の松尾山城とその周辺と考えられています。松尾山城跡は、標高 134m の丘陵上に築かれた山城で、松永湾の西側に位置します。江戸時代には、松尾山城の直下に西国街道が通る交通の要衝でした。南北朝時代に備後国高須社の地頭職を与えられてから、この地を治め、松永湾沿岸から港町尾道にかけて、勢力範囲としていたと考えられます。そうした意味で、松尾山城は、陸路にも海路にも目が届く重要な位置にあったことが分かります。

赤色立体地図によれば、山頂と尾根筋に複数の郭(平坦地)が読み取れます。また、江戸時代に描かれたと思われる『備後国沼隈郡高須松尾城絵図』には、一番高い丘陵に本丸、その周囲に矢倉と書かれた場所が複数あることから、尾根筋にも広がる比較的大きい山城であったことがうかがえます。また、丘陵麓には、複数の屋敷地も描かれており、城の南には現在も所在する福善寺の文字もみえます。

このように、松尾山城跡は、単独丘陵だけでなく、丘陵周辺の尾根筋や麓の平坦地を含め、広範囲に広がっていたと考えられます。松永湾だけでなく、尾道水道そして港町尾道の東入口を抑えられ、街道筋にも通じる絶好の場所に位置していました。

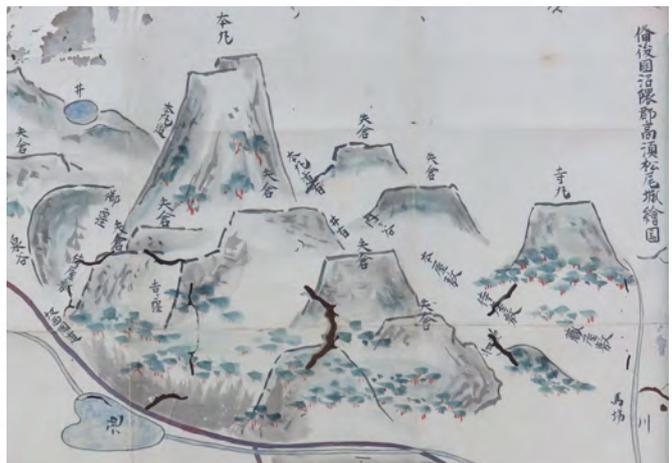


▲松尾山城跡遠景



▲松尾山城跡 赤色立体地図

中国管内航空レーザー測量業務平25中公
第92号及び広島県航空レーザー測量結果を使用



▲『備後国沼隈郡高須松尾城絵図』(高洲家文書)

高須杉原	杉原信平(系統)
木梨杉原	杉原為平(系統)

Ⅱ-3 杉原氏と家ノ城跡



▲家ノ城跡遠景(公益財団法人広島県教育事業団 撮影)



▲家ノ城跡 出土資料①(広島県立埋蔵文化財センター所蔵)

木ノ庄町木梨にある家ノ城跡は、杉原為平の築城とされています。(『木梨先祖由来書』)

平成15～19年度に発掘調査が行われ、建物跡や堀切、土坑などの遺構と、土師質土器碗、陶磁器、サイコロなどが出土しています。出土遺物から14世紀中頃を中心とする年代の山城と考えられます。

長期間の使用ではなく、短期間に使用されていたようで、本格的な山城である鷲尾山城跡と対照的な構造の山城です。年代としては、杉原為平の時代と符合しており、鷲尾山城跡の今後の研究によって、その関係性が明らかとなる可能性があります。

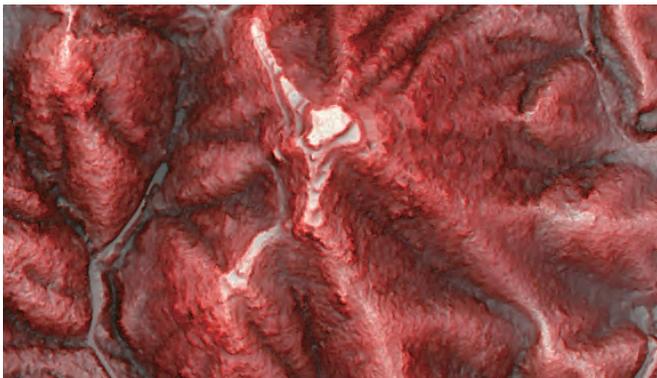


▲家ノ城跡 出土資料②(広島県立埋蔵文化財センター所蔵)

Ⅱ-4 木梨杉原氏と鷲尾山城跡



▲鷲尾山城跡遠景



▲鷲尾山城跡 赤色立体地図

中国管内航空レーザー測量業務平25中公
第92号及び広島県航空レーザー測量結果を使用

木梨杉原氏は、高須杉原氏と同じく、南北朝時代の杉原信平・為平兄弟につながる系譜です。『木梨先祖由来書』によれば、「足利尊氏に従い、各地を転戦し、その勲功により、備後國御調郡木梨庄を賜った」とあります。相原^{すぎはら}家文書『足利尊氏下文』では、勲功により杉原為平が木梨庄半分地頭職を賜っています。

そして、杉原信平は、木梨庄の鷲尾山城に、杉原為平は家ノ城に住み、現在の尾道市北部から沿岸部にかけて、勢力を誇りました。その後、木梨光信の代に、木梨姓となり、光恒の代に大きな変化が起きました。天文12年(1543)に山陰の尼子氏の侵攻があり、鷲尾山城に軍勢が押し寄せました。当主の木梨光恒は自害し、その後、その子孫が城を奪還、またさらに勢力が浮き沈みします。



▲鷲尾山城跡 出土資料(尾道市教育委員会 所蔵)

鷲尾山城跡は、標高 330m の丘陵上に築かれた山城で、山頂の主郭(平坦地)を中心に各尾根上に郭を配置しています。城跡からは、土師質土器皿や備前焼甕、青花皿、瓦片などが採集されています。それらの遺物は 15 ～ 16 世紀代のものと考えられます。

戦国時代、木梨元恒の代に、木梨庄から港町尾道にかけて支配し、毛利氏、小早川氏のもとで多くの戦いに参加しています。毛利家文書『木梨元恒他 14 名連署書状』では、天正 4 年の木津河口の戦いに参戦した武将が連署により、その戦況報告を行っています。木梨元恒の他には「村上新蔵人吉充」など村上海賊、生口水軍の名前もあります。

このように、木梨杉原氏は、尾道を中心とした戦いや物資調達、海運を担っていました。港町尾道には、中国や朝鮮半島、そして、全国からの流通があり、それは、尾道遺跡の多彩な出土品からも見ることができます。

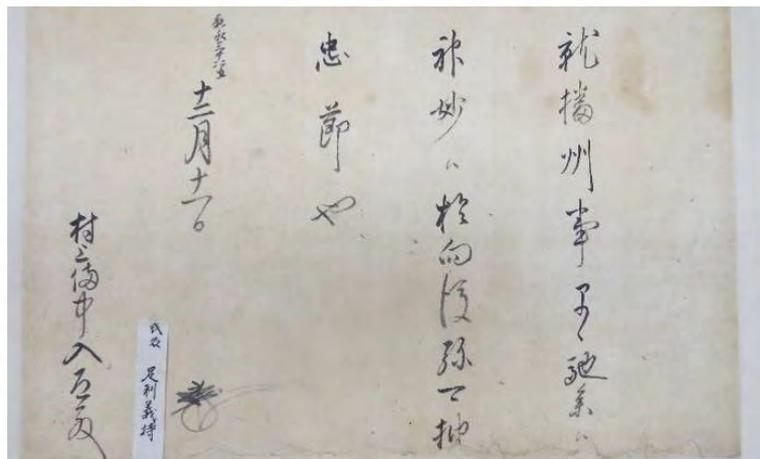
また、木梨遺跡は鷲尾山城跡の南方に位置する包蔵地で、7,545 枚もの銅銭が出土しています。これらは、当時の流通貨幣であり、大量であることから、木梨杉原氏との関係性が推測されています。



▲木梨遺跡出土銅銭(尾道市教育委員会 所蔵)

Ⅲ 瀬戸内の雄 村上海賊 因島村上氏

村上天皇から連なる「師清」を祖とし、能島・来島・因島の三家に分かれたとされていますが、貞和 5 (1349) 年に初めて「野島」が『東寺百合文書』に姿を現して以降、信憑性の高い史料(一次史料)でその活動が確認できるようになるのは村上隆勝(能島村上氏)の頃からです。また、因島村上氏は、村上備中入道(吉豊)が最初に因島土生町の長崎城に入ったとされています。



▲因島村上家文書『足利義持御内書』
(個人蔵・因島水軍城 保管)

史料上は、応永 34 年(1427)に將軍足利義持から備中入道に宛てたもので、備後守護山名氏の指揮下にあることが分かります。また、正長元年(1428)には備後守護山名時熙ときひろから沼隈郡田島の地頭職が村上備中入道に宛てられています。

このように因島村上氏は、早くから室町幕府や備後守護の指揮下にあり、警固や海運を担っていたと考えられます。室町時代の記録『満濟准后日記』まんさいじゆごうの永享 6 年(1434)の項には、「幕府からの遣明船の警固にあたり、備後守護山名氏から備後海賊村上と申す者に」と推薦されています。

また、『備後大田庄年貢引付』の嘉吉 3 年(1443)の項には、「大豆卅石いんの島おおいとのの舟」との記録があり、因島のおおい殿(宮地大炊介か)が海運に関わっていたことが分かります。宮地大炊介は因島村上氏の配下であり、金蓮寺の伽藍整備も行っています。この「金蓮寺」は、因島村上氏の菩提寺であり、当時の文書には「金蓮寺」が佐賀関(大分県)に来たことが記されていて(因島村上家文書)、海運に関わり、広い活動範囲であったことが分かります。応仁 2 年(1468)の明との交易の記録である『戊子入明記』ぼしにゆうみんきには、遣明船として「院島熊野丸」「田島宮丸」の名前があり、明との交易にも因島村上氏が関わっていたことがうかがえます。

因島村上氏は、その立地からも本州特に備後や周防地域の勢力である山名氏や大内氏、そして毛利氏、小早川氏などと密接な関係にあり、早い段階でそうした勢力の警固や水軍としての活動を行っていました。村上新蔵人吉充の時代には、鞆の浦にも村上祐康が入り、港町尾道や鞆も監視下における支配領域となっていました。

貞和 5 年	1349	『東寺百合文書』にて、「野島」の記述
応永 34 年	1427	將軍 足利義持から村上備中入道に宛てた文書あり
正長 元年	1428	備後守護山名土時熙から沼隈郡田島の地頭職を村上備中入道にあてる
永享 6 年	1434	『満濟准后日記』に、「備後海賊村上と申す者に…」
嘉吉 3 年	1443	『備後大田庄年貢引付』に、「大豆卅石いんの島おおいとのの舟」
応仁 2 年	1468	『戊子入明記』に、遣明船として「院島熊野丸」「田島宮丸」



▲村上新蔵人吉充 肖像画(個人蔵・因島水軍城 保管)

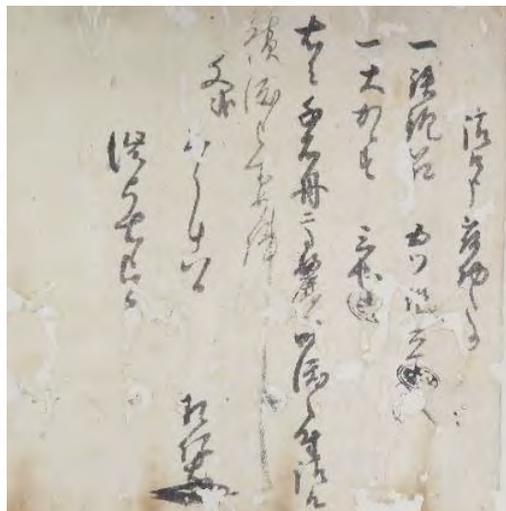
IV 尾道の豪商 渋谷氏

渋谷氏は、戦国時代から江戸時代初期にかけての港町尾道の豪商で、海運業を営んでいました。戦国大名毛利氏に従って、軍事物資の調達や輸送を行い、勢力を拡大しました。渋谷氏は、同時期に尾道で活動していた豪商であった泉屋や笠岡屋と異なり、渋谷与右衛門尉しづや よえもん の じょうという官途かんとで呼ばれていました。これは、渋谷氏が武士から商人に移ったためと考えられています。

戦国時代の海上輸送、交易には、様々な問題もあり、船の安全を確保するためにも毛利氏の下で海上輸送を行うことは大きなメリットがありました。毛利氏と渋谷氏には相互に依存する関係性があつたようです。

渋谷氏は、特に毛利氏から軍事物資の調達や輸送を依頼され、海運を担っていました。兵糧米や鍛鉄、合薬(鉄砲用の火薬)など様々で、特に豊臣秀吉の朝鮮出兵(文禄・慶長の役)では、兵糧米、酒樽、たて板(船の装甲板)、鉄砲、香の物、味噌、石火矢などが調達・輸送されています。もちろん、こうした任務の際には、恩賞や領地が与えられています。

請取申荷物之事
一 鉄砲箱 五つ 但二丁入
一 大か、す 三本
右者千石舟高麗へ御渡候時、
請取積渡申候所如件、
文録式□月十八日
相仁右(花押)
渋谷与右 まいる



▲渋谷家文書 (広島県立文書館 所蔵)



▲尾道遺跡 出土資料(尾道市教育委員会 所蔵)

V 近世の海運へ 受け継がれる系譜

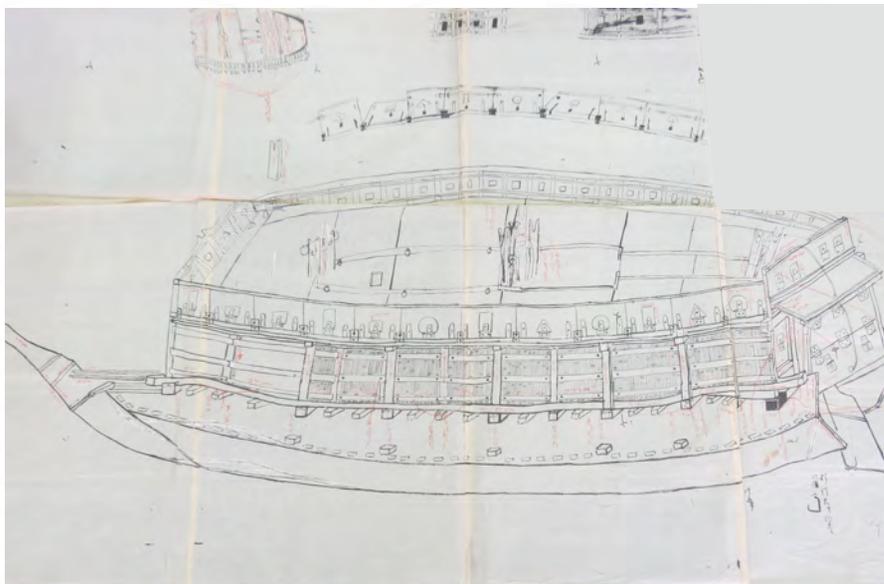
戦国時代の海に生きた【杉原氏・村上氏・渋谷氏】の系譜は、江戸時代以降も様々な形で受け継がれていきます。

木梨・高須杉原氏は、毛利氏に従い、萩藩に移り、藩士として活動しました。萩藩の各家からの史料を集めた『萩藩閥閥録』にも、木梨氏、高須氏の名前がみえます。

村上氏は、戦国時代末の海賊停止令により、活動が制限され、毛利氏に従い、船手組として活躍しました。同じく『萩藩閥閥録』に「村上太左衛門家」として名前がみえます。

渋谷氏は、江戸時代以降も尾道で豪商として活躍しました。特に江戸時代前期には、尾道の町政を取り仕切る年寄、月行司として活動もしており、泉屋、笠岡屋、秋田屋などの豪商とともに、尾道の海運を担っていたのです。

戦国時代から江戸時代に入り、海運も大きく変わっていきます。船の形状も関船などの軍船の構造を受け継ぎ、速さと頑丈さを備えた瀬戸内海の弁才船に進化していきます。その中から、さらに遠隔地である江戸や北国への廻船も生まれ、特に北国への北前船が江戸時代中期から活躍します。尾道も北前船寄港地として、飛躍的に発展しました。これには、戦国時代など中世の海運を担っていた人々の伝統文化が受け継がれ、平和な時代とともに花開いたといえるでしょう。



▲関船絵図(個人蔵・因島水軍城 保管)



▲棕浦廻船絵馬(尾道市所蔵)